

地域再生デザイン研究

研究代表者 古谷 誠章
(創造理工学部 建築学科 教授)

1. 研究課題

近年、日本の社会では、産業構造の変化、少子高齢化の進展、人口移動による地域社会の高齢化等の社会経済情勢の変化に従う地域社会構造の変化が見られる。2009 年、本研究室で行った都市再生プロジェクト推進調査の対象である島根県、雲南市は、人口減少により 6 町村の合併により誕生した市である。雲南市、特に市の周辺部となる地域では、地域社会構造の変化により官庁舎や公立学校舎など遊休公有施設が多く発生している。また市内全域で、公有施設の利用率の低下も問題になっている。このような住民の生活から分離していく地域環境の変化は地域社会の沈滞や住民の居住環境の悪化につながる。また、地域社会構造変化と共に計画される新たな施設は既存の施設との関係を持たないまま建設され、既存施設が立地する地域の孤立、機能の重複による資源浪費による環境問題も考えられる。

これらについては旧町村界を超えた広域的な地域づくりの推進、住民の生活構築の観点から当初の公有施設の目的を見直しながら地域住民のニーズを踏まえた効果的な用途転換及び活用する観点からとらえた具体的設計指針の改革が不可欠となっている。

本研究では、今後のこの問題に意欲的に取り組もうとする地方都市からの委託により、具体的な実践を伴いながら、社会経済情勢の変化と共に地域がもっている価値を見直しながら住民の生活が続けることが可能な地域再生デザイン手法の模索と提案を行う。

2. 主な研究成果

2-1. 月影/鋸南リノベーションプロジェクト

月影プロジェクトは 2015 年度で 11 年目を迎える。地域再生のために「宿泊体験交流施設/月影の郷」における継続的な関わりと周辺地域における更なる活動の拡大が課題となる。

鋸南プロジェクトは 2015 年度で 3 年目を迎える。廃校になった旧保田小学校を改修し道の駅にするプロジェクトであり、2015 年度は設計・施工・運営の補助や、竣工・開業後は保田小を拠点としたまちづくりのため、官民学連携が課題となる。

2-1-1. 月影プロジェクト

「宿泊体験交流施設/月影の郷」のファサードにあるルーバーを交換することで夏は風通しを良く、冬は雪の入り込みを防ぎ、建物内部を快適にすることを行った。(fig. 1)出張時には浦川原地区の方々にインタビューを行いながら「宿泊体験交流施設/月影の郷」の下駄箱にある浦川原地区の地図の改修・地域の情報発信を行う「うらがわかるた」の作成を行った。(fig. 2)また、2015 年 5 月には「キッズアートプロジェクト はじまりの木」(fig. 3)、2016 年 2 月には「かまくら交流フェスタ」という地域のイベントに参加し地域の文化を体験し交流をした。(fig. 4)



fig.1 ルーバー交換



fig.2 うらがわからかるた



fig.3 キッズアートプロジェクト



fig.4 かまくら交流フェスタ

2-1-2. 鋸南プロジェクト

鋸南プロジェクトは「都市交流施設・道の駅保田小学校」の設計を 5 大学共同の設計チーム「N. A. S. A. 設計共同体」のもとで、施工補助を施主の意見を反映させながら行った。(fig. 5) この施設は「新建築 2016 年 1 月号」の掲載を始めとし多くのメディアに取り上げられた。また、地域イベントに参加しながら鋸南町独自の文化や暮らしを学びながら、「道の駅保田小学校」の指定管理者 共立メンテナンスと町の担い手づくりや多様な人々の受け入れを行う団体「ようこそ鋸南」と共同し、開業後も本施設の利活用や鋸南町の活性化に取り組んでいる。(fig. 6) 具体的には、施設内の情報ラウンジに学生メンバーの作成した鋸南町のジオラマ模型を設置(fig. 7)、宿泊室には旧保田小の備品を用いたメモリー展示や黒板を用いた地図の作成を行い(fig. 8)、住民を交えたワークショップを施設内で行ってきた。(fig. 9) その他にも「道の駅保田小学校」を拠点としたまちづくりのために活動範囲を拡大し、温泉施設「笑楽の湯」の改修とバス停「さくらの駅」の設計を行った。(fig. 10) 年度末には 2015 年度の活動記録を中心にまとめた本「KYONAN BOOK 2015」を作成した。(fig. 11) これはプロジェクトの継続やさらなる発展を遂げる契機となるよう、本プロジェクトに関わった N. A. S. A. 設計共同体・ようこそ鋸南・道の駅保田小学校の管理者・町長をはじめとする町役場の方々にお話を伺いながら作成を行った。



fig.5 施主との打ち合わせの様子、都市交流施設・道の駅保田小学校



fig.6 地域イベント「アクアスロン」への参加



fig.7 ジオラマ模型作製風景、情報ラウンジの様子



fig.8 宿泊室におけるメモリー展示、内装作業



fig.9 ワークショップの様子

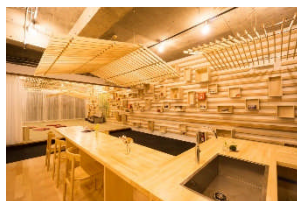


fig.10 笑楽の湯、さくらの駅



fig.11 KYONAN BOOK 2015

2-2. 島根県雲南市 遊休施設を活用した交流促進ゾーンの形成事業

2-2-1. さくらまつり 2016

本研究室の活動が9年を迎えるさくらまつりは、現在、アーティストや地元 NPO 法人が中心となり、地元の中高生を巻き込みながら運営が行われている。本年度は毎年課題として挙げられている各関係者との連携体制の構築に力を入れた。本研究室ではテーマである食・芸術・医療・場づくりの内、食と場づくりのグループに参加し、食チームにて家具の提案を行った。家具は高校生から寄せられた、農家の人の気持ちを伝える家具として、展示できる機能を兼ねた家具を提案した。



fig.1 若者会議の提案中の様子



fig.2 当日はレジと兼用して使用

2-2-2. おっちラボ蔵改修ワークショップ

雲南市では「UCC (Unnan Campus City) 構想」の名のもとに、島根大学、島根県立大学などの雲南市周辺の大学が集まって学習するフィールドとしての活動を行っている。今回はその活動の一環として、雲南市の NPO 法人おっちラボと雲南市役所政策企画部うなん暮らし推進課と早稲田大学の3者で三日市ラボを題材に WS を行った。



fig.3 ワークショップ中の意見出しの風景



fig.4 蔵の取り壊し後

2-2-3. 掛合町入間における活動

雲南市掛合町入間に位置する商店街の一角にある角場商店の改修に関して扱う。早稲田大学では角場商店の店舗部分を入間交流センターの分室とする改修を行った。



fig.5 完成後の地域の方への御披露目会



fig.6 地域の人との交流会

2-2-4. 民谷地区での活動

民谷地区での活動の一環として、民谷花田植えに参加した。民谷花田植えは、入間地域で行われている花田植えと同時期に行われる。本研究室では、民谷の花田植えが「田植え体験」としてのみで終わっていることを懸念し、入間の花田植えのように一つの観光になるような活動ができないかと考えている。今回は何か提案を行うための視察として、民谷の花田植えに参加をしてきた。その他の活動として例大祭の参加をした。



fig.7 民谷花田植えの様子



fig.8 例大祭の様子

2-3. 小豆島町堀越地区における空き家活用モデル事業

高齢化、空き家の増加が進む一方で移住者の転入が見られる香川県小豆郡小豆島町堀越地区において、堀越地区が今後どのような地区になっていくべきかを住民と検討し、現在全国的な問題となっている空き家活用の手法やデザイン提案を行うことを目的としている。

2-3-1. 教員住宅大掃除

6月には、壺井栄の小説「二十四の瞳」のモデルとなった堀越分校の教員住宅であり、現在空き家となっている教員住宅の大掃除を行った。古谷研究室では、昨年度から教員住宅に対する移住希望者のゲストハウスや地区住民との交流場所として改修提案を行ってきた。この大掃除は、4月に行ったワークショップにおいて住民から出た教員住宅に関する意見をもとに、教員住宅を改修・活用に至るまでの日常的に活用していくための1つのステップとして住民と共同で行ったものである。



大掃除後の教員住宅



掃除中の様子

2-3-2. 三社祭

毎年7月に堀越地区で行われる伝統的な地区行事である三社祭において、2015年4月26日に行われた第1回ワークショップにおいて、地区住民より出された意見を基にして提案を行った。

2-3-3. 荒神社舞台・堀越庵で上映

堀越の家に眠る、古い堀越の写真を集め、1枚ずつ写真にまつわるエピソードのお話を伺い、スキャンし、デジタル化を行った。堀越の古い写真から、新しい写真まで様々な写真までを荒神社舞台・堀越庵で上映を行った。



荒神社舞台での「堀越の記録と記憶」上映の様子



お参りの様子

2-3-4. 瀬戸内国際芸術祭への出展

瀬戸内国際芸術祭 2016・秋に「シシ垣でつくる堀越暮らしの輪プロジェクト」という作品を古谷研究室として出展する。シシ垣とはイノシシ除けの柵のことであるが、「単なるイノシシ避けの柵」ではなく「イノシシの住処である山と、人々が暮らす里の境界に対し、人々が日常的に訪れる場所と機会」をつくることであると捉え、現在イノシシの被害に遭っている堀越地区に作品を製作する。



最終的な完成したシシ垣イメージパース



シシ垣イメージパース

3. 共同研究者

斎藤 信吾（創造理工学部・助教）

根本 友樹（創造理工学部・助手）

4. 研究業績

特になし

5. 研究活動の課題と展望

5-1. 月影/鋸南リノベーションプロジェクト

2015 年度は「都市交流施設・道の駅保田小学校」の設計・施工・運営補助、「笑楽の湯」改修、「さくらの駅」設計を中心に行った。2016 年度はさらなる鋸南町活性化のため、官民学連携、より多くの町の人との共同が課題となる。

5-2. 島根県雲南市 遊休施設を活用した交流促進ゾーンの形成事業

都市再生モデル調査以来、古谷研が雲南市に携わって 9 年目を迎えた。昨年までの取り組みの中で、雲南市がやがて地域の人々の力で「まちづくり」を担っていけるように、といった目標ができた。本研究室との活動がいつまでも続く保証はない。地域の人だけでも活動が行えるように、「早稲田中心の活動」ではなく、「早稲田がサポートする活動」を行っていきけるような体制づくりに今年度は重きを置いた。地元の島根大学を中心に、他の NPO 法人との活動を通じて、本研究室の活動を紹介しながら、時には建築学生だからこそできるアドバイス等を提案しつつサポートを行った。地元の団体や学生とのつながりができたことは、今年度の大きな前進と言えよう。若者会議や花田植えなど、様々な活動に参加する中高生がやがて大人になったとき、また自分の町の「まちづくり」の担い手になることに期待する。

5-3. 小豆島町堀越地区における空き家活用モデル事業

2016 年度は瀬戸内国際芸術祭 2016・秋に出展し、シシ垣を実際にセルフビルドでの製作を行う。シシ垣の完成を目指す過程で、地区の住民同士や大学生、専門家が関わり合うことで、堀越をめぐる 1 つの大きな人の輪が生まれること、そこから展開していくまちづくりのプロセスそのものが作品であると考え。

シン垣は、2016 年の瀬戸内国際芸術祭 2016・秋において約 60m 製作する予定である。その後も段階的に製作し、最終的には堀越の集落の持つ海を抱く弧を持つ空間構成と人々のつながりを顕在化するランドアートとして完成させる。また、堀越地区内には壺井栄の「二十四の瞳」のモデルとなった堀越分校の教員住宅が空き家となって現存する。老朽化し現状では生活の場としての利用は難しいが、文化的価値や地区における中心性の観点から保存が望まれている。そこで堀越地区に新たな移住希望者などが現れた際に利用するゲストハウスとして改修する可能性が提案されている。瀬戸内国際芸術祭の際に、シン垣展示と合わせて堀越地区で行ってきた活動の展示や、改修後の教員住宅で行ってみたいことを 1 つのモデルケースとして行うイベントを行う。堀越地区の暮らしの魅力を発信し、移住促進・空き家活用の取り組みを行っていく。